

孕



孕作戦開始！



伍



くす！



















































































































































































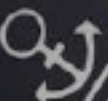












おっ

おっ

おっ

おっ

おっ

おっ

おっ





















































































びしょ

びしょ

びしょ

びしょ

びしょ

びしょ





5/17

5/17

5/17

5/17

























ガ

ガ

ガ

ガ

ガ

ガ





アハッ!

アハッ!

アハッ!

アハッ子!

アハッ!

アハッ子!

アハッ子!









アツク

アツク

アツク

アツク

アツク

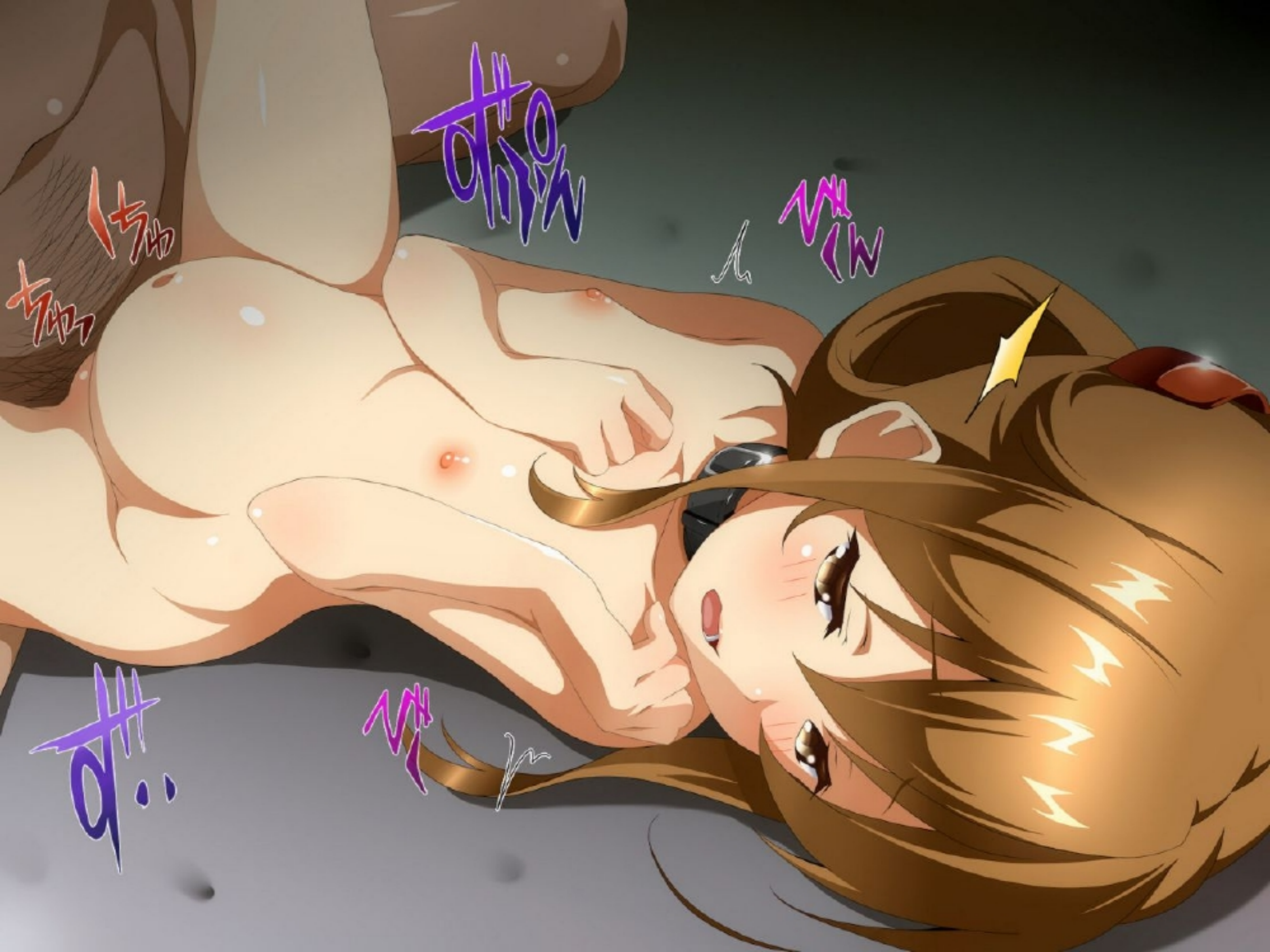
アツク

アツク

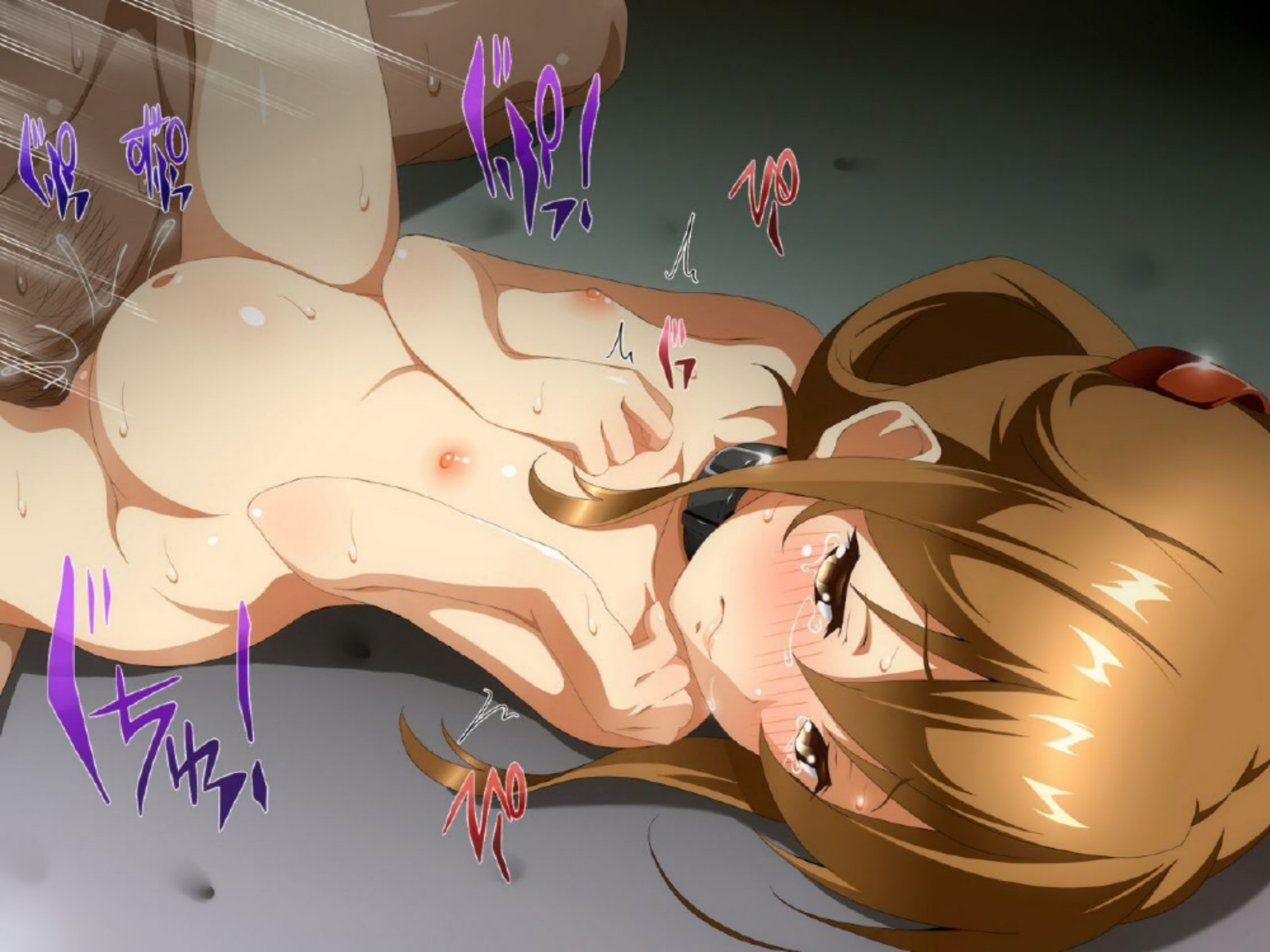
アツク

アツク









ガッガッ

ハッ!

ハッ!

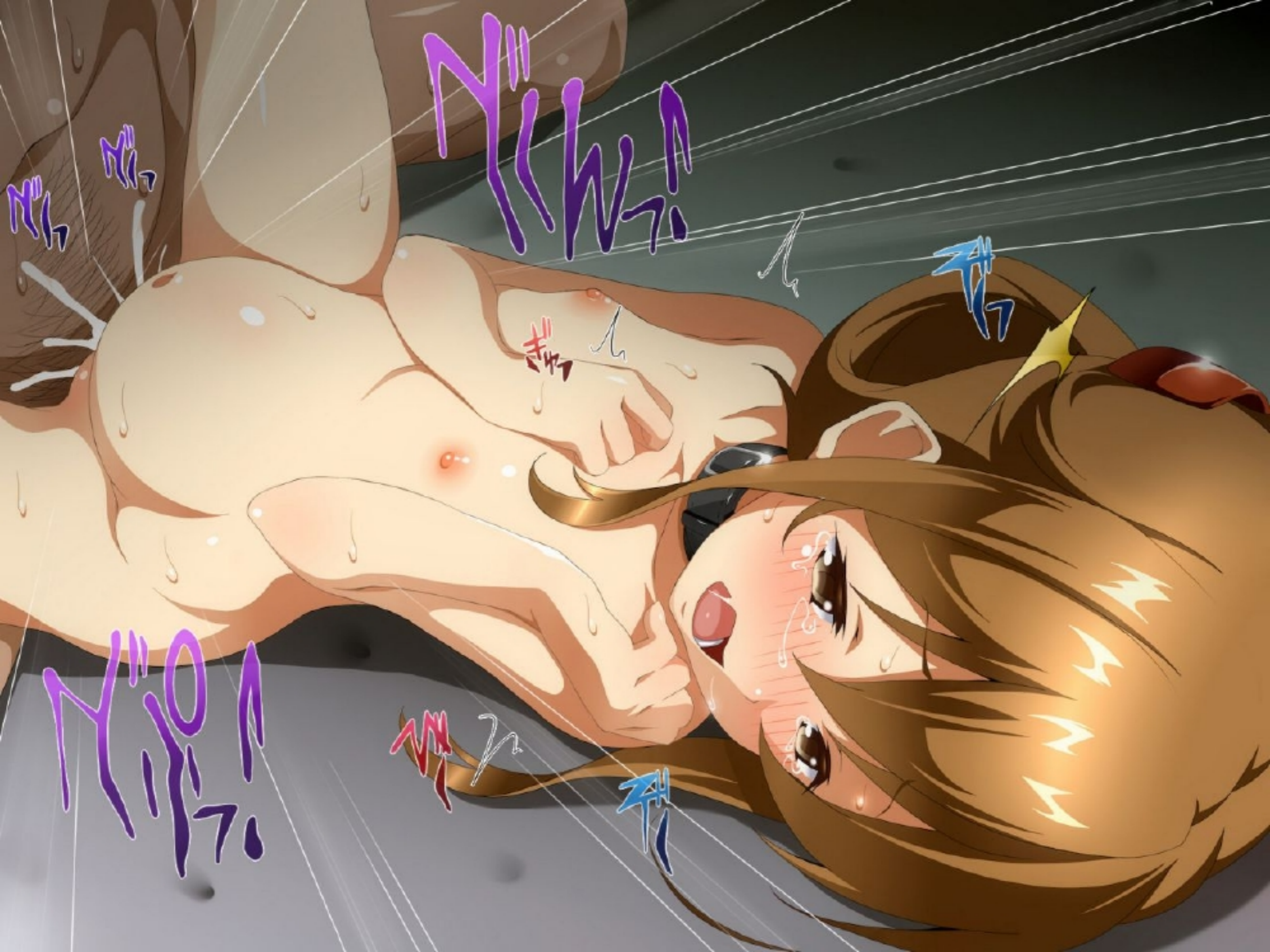
ガッガッ!

ハッ!

ハッ!

ハッ!

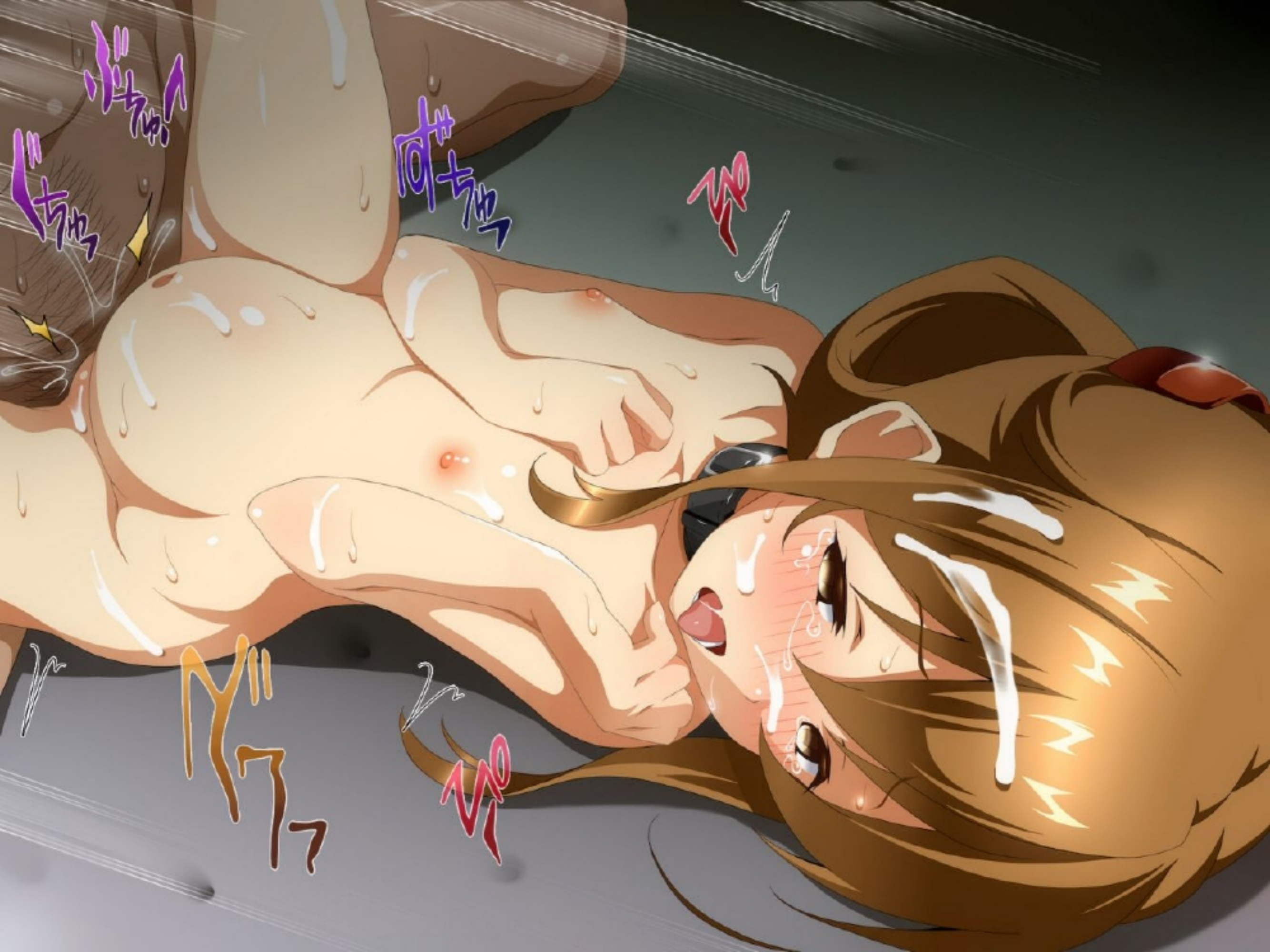








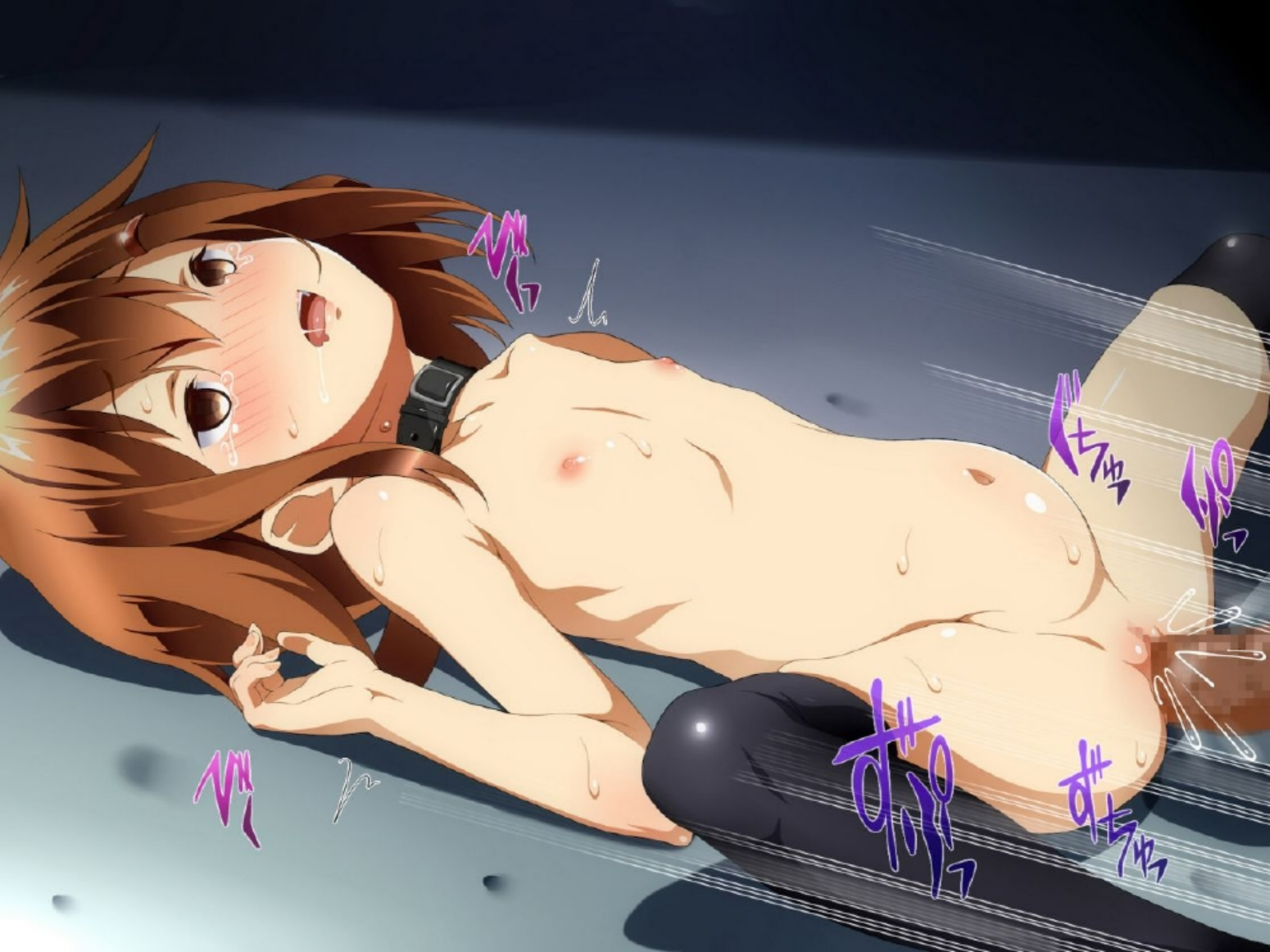




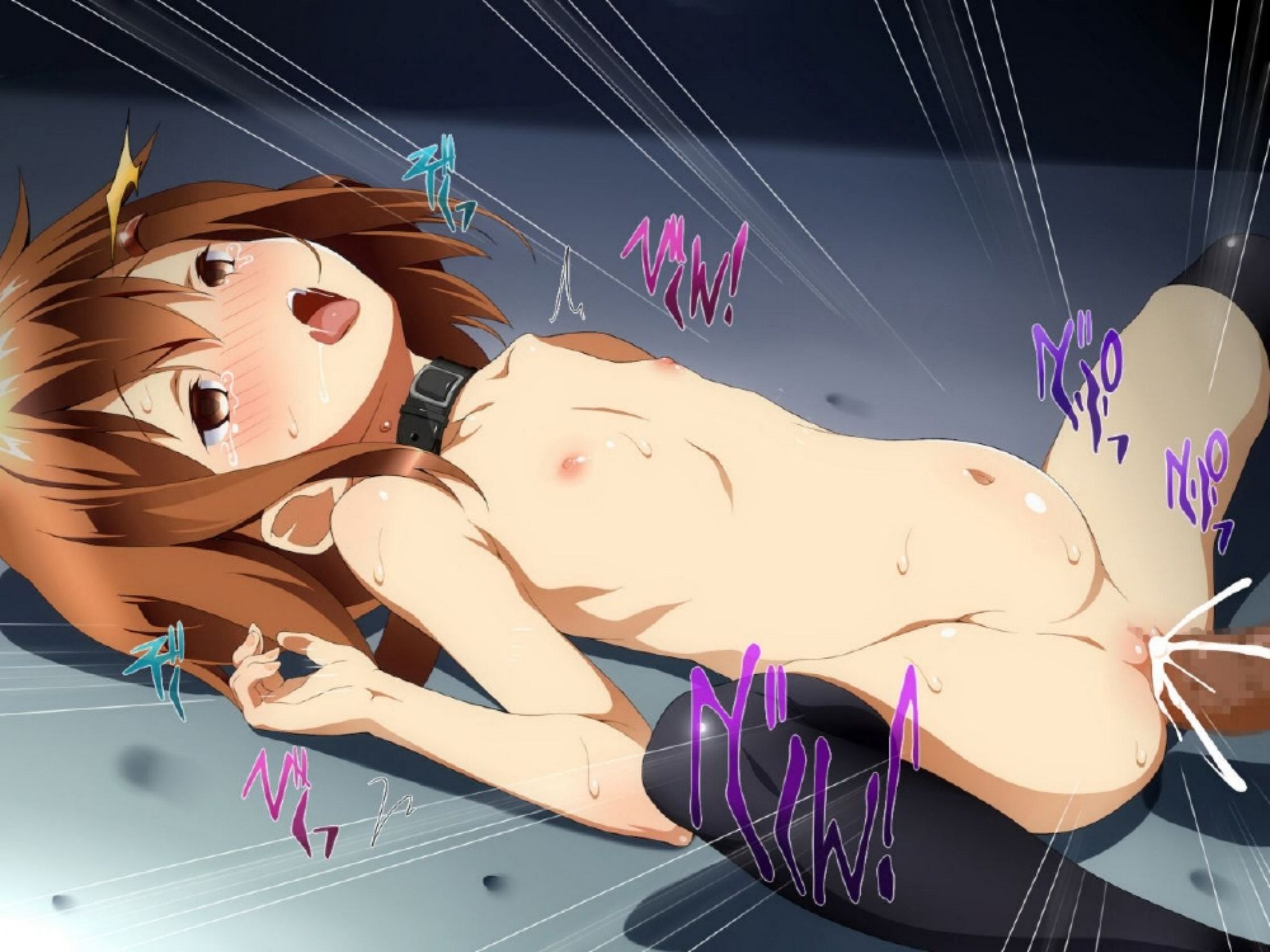








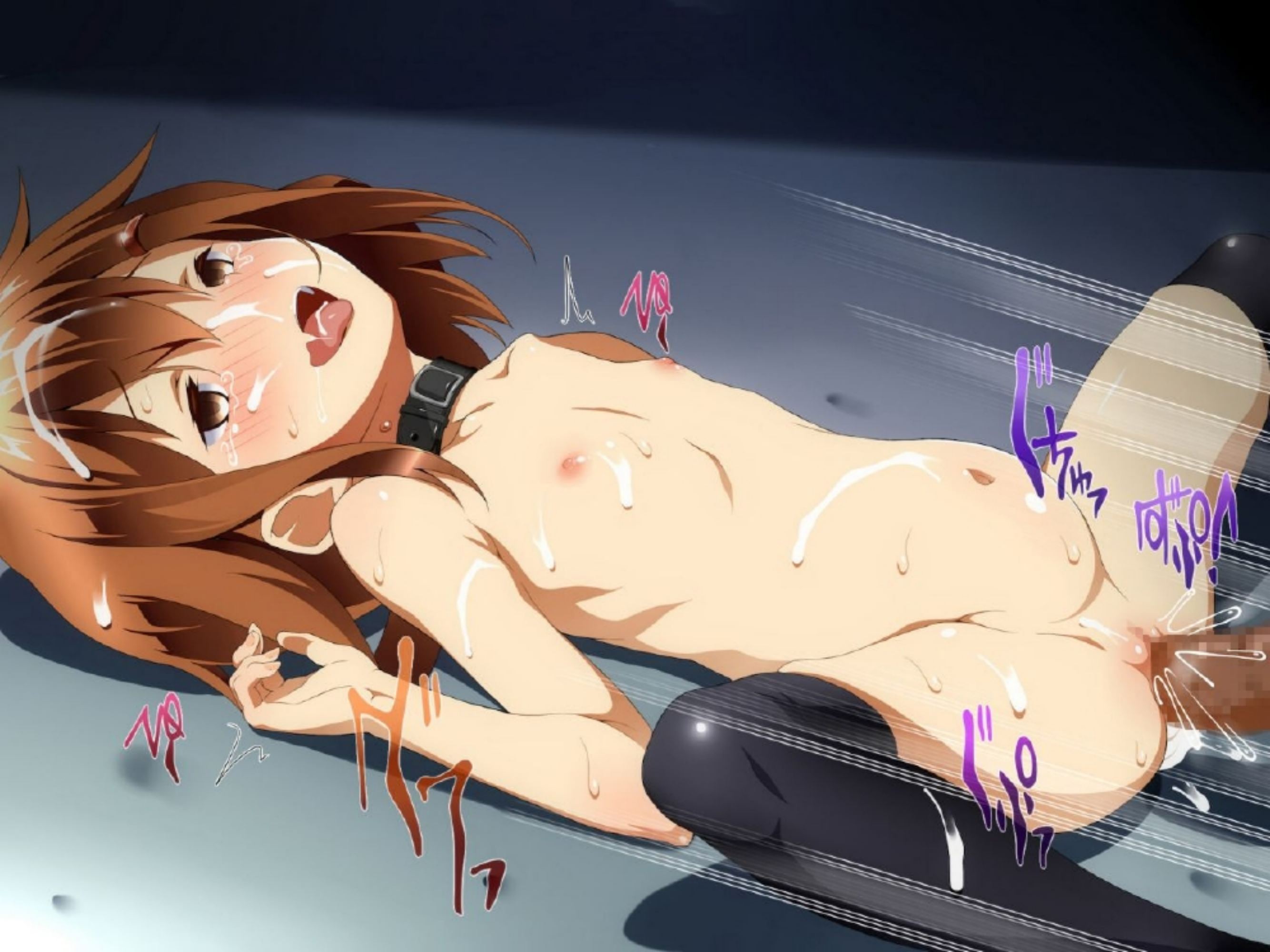














「ぐひっww暁ちゃんっつかまくえたっ」

「やだっ、は、離し…スカート捲るのダメえっ!!  
暁のぱんつ見えちゃうっ!!」

「あれえっ?暁ちゃんはお子様ぱんつじゃなかったんだあ  
意外だなあ」

「ど、とーせんでしょ!暁はレディなんだから!」

「うんうん、これじゃあおじさんがチンポ  
ブチこみたくなるのも当然だよねっ」

「…へっ?」





「初モノロリマンだけに流石にキツウいー!」

「え……あ……え……?」

「これで奥まで……ふん……  
やったね暁ちゃん!これで本当に大人のレディになったよ!」

「あ……な……何……これ……」

「暁……何、されてるの……?」





「はあっ、はあっ！  
初モノ特有のこのキツさたまらん！」

「い、ぎいっ！い、痛っ！  
痛いっ、や…やめっ…！」

「ごめんね暁ちゃんっ、全部出すまで  
腰、止まらないっ、ぬんっ！」

「出…す？出すって…何を…  
痛っっっっっっっっっっっっっっっ！」





「ああっ、出るっ!!  
特濃!!」ってリザーブメン出るウー!!」

「何…これ…?何か…入って…  
暁の中に入ってきてる!!」

「まだまだ種付けっ、暁ちゃんに種付けえ!!」

「やだーやだやだあ!!  
これ以上入ってこないで!!  
怖いっ、怖いよおお!!」





「うう……ひぐ……ぐすっ……  
やだっ……やだっ……言ったの……」

「ごめんごめん、気持ち良すぎている  
次からは優しくしてあげるから」

「っ……ぎ？次っ……」

「あれ？聞いてなかった？」

「暁ちゃん達は俺達整備班のサポート任務に  
着くことになったって  
まあ上もこんなサポートとは思ってないだろうけど」

「そ……んな……」







「はあっはあっ、流石レディな暁ちゃんっ  
さっきまで処女だったのにオマンコから  
もうこんななにやらしい音してるよっ!」

「…あ…あ…も…やめ…」

「暁ちゃんが俺の赤ちゃん孕むまで  
毎日頑張るからねっ、ふんっふんっ!」

「あ…うあっ…た…助け…  
しれえ…かん…何で…こんな…」

あーっ  
あーっ  
あーっ

あーっ  
あーっ  
あーっ

あーっ

あーっ



「ふひw逃げたら駄目だよヴェルちゃん  
これも任務なんだからさw」

「私達が聞いたのはサポート……  
こんなのは任務じゃ……」

「ヴェルちゃんを二目見た時から「うつしたくてたまんなくってさあ  
「こんなんじゃないよおじさん、仕事に集中出来ないなあw」  
「そんな理屈が通るわけ……」













「あぁっ、もうイクっ、ヴェルちゃんの膣内につ  
赤ちゃんミルク出るっ！ぐっうっ！」

「うぁっ、やっ、駄目！それだけは……  
あっ……あっ……あああああっっ！」

「ヴェルちゃんの可愛いとろけ声で  
ドロドロミルクまだまだ出る出るっっ！」

「あっ……あっ……うぁあっっ！  
だ……めえっ……ミルク……だめえっ！」







「あ……あ……うあ……」

「ふう……初めてなのにあんなに声出すなんて  
ヴェルちゃんにはエッチな子だったんだねえ」

「ち……ちが……そんなわけ……」

「それとも無理矢理されるのが好きなのかな？  
ヴェルちゃんとはとんだト変態さんだなあw」

「そ……んな……私は変態なんかじゃ……」



「はあっはあっ、「ニ」「?」  
ヴェルちゃんは「ニ」グリグリされるのがいいの?」

「あっ…あっ…ひんっ!」  
「や…やあっ…ぐりぐり…やあっ…!」

「やだって言ってもまた可愛い声が出ちゃってるよ?」  
大人チンポでグリグリされるのそんなに好きなんだ?  
それじゃもっとしてあげるねっ」

「やっ、あっ、あっ、ひあっ!」  
私…なんで…こんなっ…ひんっ!」  
おかしく…おかしくなっちゃ…あああっ!」





「きひっwもう逃げられないよんっ、とー!」

「あうっ…く、首が…っ…!」  
は、離し…っうあっ…!」

「ひひっwいゝねえその反応  
もっと虐めたくなるっでもんよw」

「く、苦し…のです…ゆ、許して…!」

ガッ

ギョッ





「許すも許さないもないんだよなア  
いい声で鳴いてくれよオ?ふん!」

「あっ、がっ…うあっ…!  
や、やめっ…そんなのっ、入らな…あああっ!」

「この膜をブチ破る感覚いいわ  
」」から奥まで「一気に…オラ!」

「ひ…き…ん…ん…ん…」





「ぐひっwどうよ電ちゃん  
大人の極太チンポの味はよオ！」

「あつ、あうっ！ち、血が…っ  
血が出て…痛うう！」

「女になった証じゃねえかw  
感謝してほしいくらいだねえ」

「これ以上はっ、お股っ、裂けちゃ…  
ひうんっ！」





「はあっはあっ！今から特濃のザーメン出してやっからな！  
残さず飲み込めっ、ぬうつっ！」

「あっ！ひっ…あああっっ！  
何…これっ、熱…ひああっ！」

「ヒハハ！まだまだ出るわ出るわ！  
初セックスで孕めやオラあっ！」

「熱いのっ、まだ入って…や…っ  
やだやだ…っ！あああっっっ！」







「うっ…ひぐ…ぐすっ…」

「おいおい俺様のザーメンを垂れ流すとは何事だオイ  
全部飲み込めって言ったよなア？」

「ひっ…ひっ…ひっ…めんなさいっ」

「こりゃすっかり調教してやんないとならぐひっ」

「ひいっ…」

わんわん

わんわん

わんわん

ゴッ



「オラオラ！どうだ俺様のチンポの味はよお？」

「…あつ…お…おい…ひいですう…」

「ああ？それだけかオイ？  
笑顔と感謝が足りねえんじやねえか？」

「…ひっ…す…素敵なおチンポで沢山…  
突いていただいで…あ…ありがどうございまひゅ…」

「へっW中々仕上がってきたな  
これから毎日調教してやっからな  
ありがたく思えよ？」





「ふひっw駄目だよ雷ちゃん  
ちゃんとお仕事してもらわないと〜」

「離してっ!〜こんなの任務内容に入っていないんだから!  
司令官が聞いたたら只じゃすまないんだからね!」

「上の方は今別の作戦でいっぱいだからねえ  
雷ちゃん達にかまってる暇あるかなあ?w」

「司令官なら私が言えばきつと・o・o!」

キッ!

ナ





「あくもうゴチャゴチャやるせえー！  
てめえは俺のチンポの世話すんのが仕事なんだよオラあー！」

「がっ！あっ！ああああっ！」

「ハハハ！流石初モンのロリマンだったっ  
狭すぎてすぐ出ちまいそうだわ！」

「何……これっ……私……今っ……  
何され……っ、あっ、うああっっ！」

あわ！





「はあっはあっ！雷ちゃんの初マンコ美味え！  
チンポにギチギチ絡み付いてきやがる！」

「はっ、あっ、うあっ！  
は…離し…てよ…っ、あああっ！」

「こんな極上マンコを手放すワケねえだろっ  
奥までじっくり犯し尽くしてやるわ！」

「うっ…い…痛…い…よ…っ！  
絶対…っ、司令官に…っ、言いつけてやるんだから…っ！」

おち

おち

おち

おち









「…あ…あ…あ…あ…」

「ふう…今までで一番出たわあ  
こりゃ妊娠確定ってやつかなw」

「にん…しん…？わ…私…が…？  
な…何で…」

「ん…？雷ちゃんにはまだ早かったかなw  
まあそのうち嫌でもわかるようになるさw」





「いい感じにほぐれてきたマン」もたまんねえっ  
「りやチンポが萎む暇ないわ」

「…あ…う…あ…」

「へっ、すっかり大人しくなったな  
まだまだギンギンなんだからしっかりとぐれよオイ」

「…そ…んな…こんな…いつまで…  
た…助け…しれ…かん…みんな…」

ずちゅ

ちゅ

ズ

お

お





「おっと、今日は暁ちゃんからしてくれられるのかな？」

「男の人を悦ばせるのもレディの嗜みだもん♡」

「そいつは素晴らしい考えだ！  
でも暁ちゃんにそんなテクあるのかな？」

「とーぜんでしょ！暁はレディなんだから！  
おちんちんいっぱい蕩けさせてあげる…えい♡」





「ああ〜やつぱは暁ちゃんのところろロリマンらしくわ〜  
腰が無意識に動いて…ぬうん…!」

「あつー!やつー!だめ!今日は暁がするって…っ!  
ひやうん♡!」

「悦ばせる側が蕩けた声をあげるとは不甲斐無い!  
こゝは制裁のピストンを…ふんっ、ふんっ!」

「あうっ!だっ、だめ!それだめえ!  
カチカチのが下から…あああつ♡!」





「制裁のトドメに大人の特濃ザーメンを…ぬうっっっ！」

「んあっっ！やっ、やあっ！あ、熱いのっ  
あちゅいのっ、のぼってくりゅっっ！」

「ぐっっ、マン」が更に締め付けて…っ  
まだまだ出るわ出るわ！」

「あああっ…しゅ」いのっ…  
しゅ」いのっぱいっ、入ってくりゅっ…  
あっ♡あっ♡あっ♡ああああっ…！」





「あ…はっ…はあ…はあ…」

「ふうく、我ながら大量に出したもんだわ」

「うう……暁がするって…言ったのに…」

「」のザマで一人前のレディとは片腹痛いっ  
これは朝までガッツリ仕込んでやらねば！」

「…ふえ…？」





「あゝ出る出るっ、また出るよ暁ちゃん！」

「しゅいっ♡しゅいっのまた出たあ！  
せーし♡せーし気持ちイイよお！」

「マンコでチンポをしごく様な腰使い…たまらんっ！  
あゝまた勃ってきたわ！」

「ひあっ♡暁の中でおちんちんまたおつきして…  
ああああっ！気持ちイイのっ、止まんないよお♡」



んんん

んんん

んんん

んんん

んんん



「…アムルちゃん…」

「ん？なんだい？」

「えい…う…」

「騎上位というものなんだけれど…  
ど…」がおかしかったかな？」

「…う…う…ええええ」

「ああ、これは私からするものなんだね  
不勉強ですまない…じゃあ、始めようか」

…

…









「こんななのっ、我慢出来な…ぐっっっっ」

「あ…っ…っ…っ…っ、まだっ…早…っ」

あ…んっ…な、中で膨らんで…っ…」

「ああ…出る出るっ、全部出るっ  
ヴェルちゃんの膣内に全部出るっ」

「んっ…あ…っ、ホントにまだ…出て…っ  
こ…っ…ん…な…っ、声…我慢出来な…っ  
あああああっっ」

おっ  
おっ

おっ  
おっ

おっ  
おっ

おっ  
おっ

おっ  
おっ

おっ  
おっ





「…はあっ…はあっ…ん…あ…」

「ぶっ、こんなに出的のは久しぶりだわあ  
もうHの中空っぽだよ」

「……まだ…」

「…」

「…本当に…全部…出たのかい…」

「…」





「ヴェルちゃん……流石にもう……」

「だめ……だよ……、まだ……私が……」

「……えっ……」

「……っ……ま……まだこの子が……  
固い……っ……ままじゃないか……」

「そっ、それは……ヴェルちゃんの膣内が良すぎて……」

「はあ……はあ……いい子……だね……  
それなら……っ……もっど……もっど……」

「も……っ好き……っ……っ……っ……」

「……っ……っ……」

「……っ……っ……」

「……っ……」

「……っ……」





「ふい、今日も頼むぜ電ちゃん」

「は、はい…ど、どうぞ  
召し上がり下さい…なのです…」

「あ、これこれ  
電ちゃんマン」で仕事の疲れも癒されるわ」

「あ…ん…んう…っ…」



あ…ん…んう…っ…

あ…ん…んう…っ…

あ…ん…んう…っ…

あ…ん…んう…っ…

あ…ん…んう…っ…



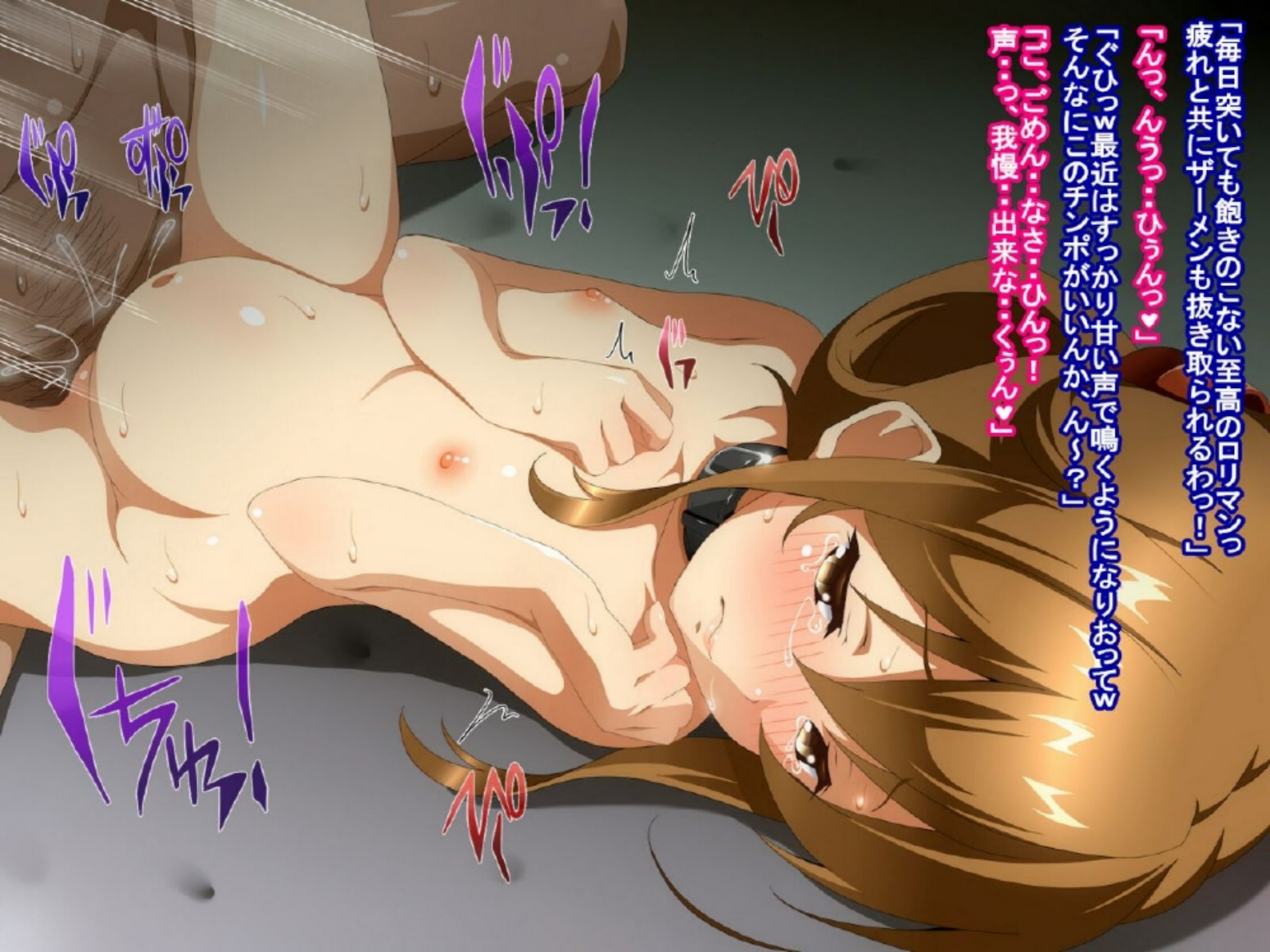
「毎日突いても飽きのこない至高のロリマスター  
疲れと共にザーメンも抜き取られるわっ!」

「んっ、んうっ…ひうんっ♡」

「ぐひっw最近はずっかり甘い声で鳴くようっ!なりおいでw  
そんなにもこのチンポがいいんか、ん〜?」

「ご、ごめん…なさ…ひんっ!」

声…っ、我慢…出来な…くうん♡」









「…あ…はあつ…はあつ…」

「派手にいったなあオイW  
膣内出しでよがるとはとんだ淫乱だわW」

「…ごめん…なひやい…  
えっちで…ごめん…なひやい…」

「謝りながらマンコをヒクつかせるとはけしからんっ！  
これはもう朝まで調教が必要なようだわい！」





「オラオラどうだった、「」の淫乱マン」がー」

「はっ♡あっ♡はひっ♡」

えっちなおまんこでっ、「めん…なひやつ、ひあっ♡」

「まだよがるかコイツはっ！

そんなにチンポが好きかオイ！」

「しゅきでひゅっ♡」

チンポだいしゅきでひゅうっ♡」

「だったらブツ壊れるまで犯してやるよオラあー！」

「あああああっ♡♡♡」





「雷ちゃんただいま〜」

「……………」

「あゝ今日もかかったるかかったわ〜  
雷ちゃんがいないなかったら仕事なんて  
とつくに辞めてるよな〜」

「……………」

「ん？ああ、スイッチ入れるの忘れてたわ」

L...W





「よ…っとおー！」

「…cccc…」

「ふひwチンポを入れると元気になるなんて  
雷ちゃんにはホントにエッチな子だねw」

「…あ…う…あ…っ」

「未だ衰えぬこの締めりっ  
あく生き返るわw」

「…あ…う…ああっ」





「あゝイクイクっ！溜まりに溜まった  
ザーメン出るわー！」

「ooooooooo~」

「こんな状態でも射精でよがるだけは  
なんといっつ！だったら好きなだけ  
注ぎ込んでやるわー！」

「…っ！…あつ…はっ…ああつ…！」





「ふう〜、ガッツリ出たわ〜  
これで明日も仕事頑張れるってもんだよ」

「…あ…は…はあつ…はあつ…」

「ほうけた顔の雷ちゃんのマニ」がら  
溢れ出るザーメンを見ながらの「服の  
これもまた乙なもんだw」

「…あ…あ…う…はあ…」

「…やっべ、また勃ってきた」





「…あつ…あつ…はあ…っ」

「はあつ、はあつ、…そういや明日は司令が「つちに戻ってくるって言うってたな。ロ・グ・ビ・W」の雷ちゃん見せたらどんなツラするかW」

「…し…れえ…っ？しれえ…かん…？」

「チツ、司令には反応すんのかクソがっ…ひびWなら今よりポロクソにして司令の前に放り出してやるよっオラあー！」

「しれえ…かん♥しれえかん♥…すき♥…だいしゆきい♥…っ」

